東アジア古典学セミナー「いま人麻呂歌集を考える」　神野志・毛利報告コメント　０８，６，７

北海道大学　身﨑壽

両氏の報告は、人麻呂歌集の表記が「歌集」を志向するなかで機能しているという点において認識を共有する（その点ではわたくしも同様）とはいえ、毛利氏がなおウタの表記の現実的・歴史的過程を問題にするのに対して、神野志氏は『万葉集』という構造体の内部での問題として歌集表記の機能をとらえようとする点、まったくことなる平面（flat，floor）にたっているといわざるをえない。わたくし自身はというと、基本的には毛利氏と同様に現実のウタの表記史をかんがえるもので、その基本的なたちばは、

①ウタの表記は「仮名書き」からはじまり、上代を通じて「仮名書き」がウタの表記における基本的スタイルだった。

②歌集の編纂への志向が契機となって、正訓字仮名交用表記が採用された――したがって、『万葉集』のウタの表記は、同時代の一般的なウタ表記（たとえば歌稿やウタの贈答などにおける）ではありえない。

③人麻呂歌集は、人麻呂が宮廷歌人としての地位を確立したとおもわれる持統朝後期以降の成立であり、略体表記は詩体を庶幾したものと思われる。

＊参照　身﨑１９７８および２００５報告（報告書刊行は２００６）

というものだが、神野志の（descriptive な？）方法に対しても、一定の共感を否定しえない。

そこで、コメントはどうしてもふたつの局面に分裂したものにならざるをえない。

〇共通の質問

・歌集を志向するものであれなんであれ、ウタを表記するばあい、「音声言語」（かならずしも実際の誦詠を意味しないが）への還元を無視したものではありえまい。略体表記についてそれを保障するのは、『万葉集』の他のウタの表記スタイル（正訓字主体仮名交用や仮名専用）と定型の存在、ということになろうが、結局それは、日常的のみならずウタの表記において正訓字主体仮名交用・仮名専用などの表記がさきだって存在したことをみとめることにつながるのではないか？そのことと今回表明した両氏の（とくに毛利氏の）たちばとは矛盾しないか？

〇神野志報告に対して

１（大前提として）今回採用したわくぐみは、結局のところ実態としては略体表記を古体とはみとめないことをうけいれるということなのか？――身﨑２００５はその時点での神野志の年代観を批判したが、これを回避しつつ軌道修正をこころみたものとうつるのだが･･･

２略体表記の採用は、それを（実態としてではないにしろ）「古」とする共通認識があったことを前提とするものなのか？だが、それをみとめるならば、結局それは、毛利の実態認識と通底する可能性をもち、さらには稲岡擁護につながるだろう。

３このように人麻呂歌集を「構造的に」措定するばあい、略体―非略体の表記の存在をどう意義づけることができるのか？これをふくめ、構造的に人麻呂歌集を定位するには、細部の論理の整合がなお追求されなければなるまい。

〇毛利報告に対して

１すくなくとも、歌集におけるウタの表記について、正訓字主体仮名交用や仮名専用の表記にさきだつものとして略体表記などをみとめるのか？それは結局稲岡と同一の認識におちつくことになるのではないか？

２「詩風」という用語をもちいることにどんな意義があるのか？